

佐藤 流葉(さとう・りゅうよう)

1、プロフィール

俳人。戦前より「石楠」の幹部として活躍。戦後連峰社を主宰、「連峰」を発行するかわら、青森県観桜俳句大会を昭和 27 年より主宰。

<生没>

1903(明治 36)年 11 月 21 日 ~ 2008(平成 20)年 9 月 5 日

<代表作>

句集『十六夜句集』『灯の裏』

<青森との関わり>

中津軽郡藤代村(現弘前市)に生まれる。一時西郡森田郵便局に勤務、戦後弘前市で司法書士開業、連峰社創設。

2、作家解説

本名喜逸。大正 9 年仙台逓信局通信生養成所を卒業後、西郡森田郵便局に勤務、森雲吟社を結び、翌年俳誌「森雲」を出した。また、鱒ヶ沢の杉野美友の勧めで星野麦人の「木太刀」(東京)に投句を始めた。大正 14 年 1 月、一家で樺太に移住、樺太庁豊原郵便局に勤務を始めた。

昭和 2 年臼田亜浪に師事、「石楠」に参加した。昭和 5 年より樺太庁内務部逓信課に勤務、月刊「逓信協会雑誌」の編集を担当した。昭和 12 年に亜浪が樺太行を企てた際、流葉は同道した。この時流葉は「石楠」幹部、「樺太石楠」の発行者となっていた。また「水鳥」幹部、「石鳥」同人、最高幹部の地位にあり辺地において俳句に生命を燃やしていた。

昭和 15 年 7 月、満州国政府国務院興安局へ転じ、人事係長、経理課長を歴任、その間、「大陸石楠連盟」幹事、「山査子」同人、「俳句満州」編集委員、「芸文」俳句部門編集委員等を務めた。

終戦後 21 年に帰国し、27 年に弘前市で俳句結社連峰社を結成、機関誌「連峰」発行、青森県観桜俳句大会を長年にわたり主宰した。また、「南風」「青玄」「かまつか」「白魚」「草苑」「林苑」「航標」等の同人をも務め全国的にも高い評価を得た。29 年には『十六夜句集』、46 年には『灯の裏』の句集を上梓、48 年には現代俳句協会会員に推挙された。その永年の俳句活動に対して、52 年には第 19 回青森県文化賞、55 年には県褒賞が授与されている。54 年、弘前市の革秀寺に「山には雪その山の前雲迅し」の句碑が建立された。

3、資料紹介

○『灯の裏』

図書

1971(昭和 46)年 11 月 3 日

180mm × 130mm

第 2 句集。平塚石楠会白魚発行所より、白魚叢書第 11 集として刊行。昭和 33 年以降 45 年までの 551 句を収める。深い抒情を湛えた佳作が多いが、時に抒情を拒否した作品もあり多様な表現を試みている。